



俊英NOW (台湾修学旅行特集)

●11月25日(月)

・台中市の高校との交流(美術の交流授業)



Y先生の背中

・高雄市の蓮池潭 龍虎塔

龍の口から入り、虎の口から出るとご利益が！



●11月26日(火)

・烏山頭ダム

日本の植民地時代、日本人技師八田與一により

1930年完成。台南の荒地が一挙に穀倉地帯となった。

八田與一銅像前にて



・台北近郊 十分

かつて炭鉱の町。
今は天燈上げで栄えている。



・台北近郊 九份

(元金鉱山の町。山の斜面にレトロな街並)

『千と千尋の神隠し』のモデルになったという茶館



●11月27日（火）

午前 クラス別行動（足つぼマッサージ等）

午後 クループ別台北市内自由行動



●11月28日（火）帰国

桃園国際空港にて



校長ESSAY

読書の思い出『アンクル・トム的小屋』

「すみ子ちゃんが泣いてるぞ。」と教室がひとしきり大騒ぎになった。小学校の読書の自習時間のことだ。まわりに集まったガキどもを無視して本を読み続けるすみ子ちゃんの頬に涙が走っていた。本を読んで泣く人をはじめて見た。ちょっとした衝撃だった。本の表紙には『少年少女世界文学全集 アンクル・トム的小屋』という表題が書いてあった。ちなみに、そのとき私が読んでいたのは、『理科、なぜなぜ教室』である。

『アンクル・トム的小屋』（Uncle Tom's Cabin 作者ストウ夫人）は、アメリカ文学史上大変有名な作品の一つである。美しい心の持ち主で、誰からも愛された黒人奴隷トムおじさんが、最後は悪辣な奴隷主の虐待によって命を落とすまでが描かれる。出版は、1852年、奴隷制度などを巡って起こったアメリカ史上最大の内乱「南北戦争」（1861-65）のほぼ10年前であり、キリスト教人道主義の立場からアメリカの奴隷制度を厳しく批判する作品として当時のアメリカの世論に一定の影響を与えた。世界史の教師としては、外せない一冊である。

ところが、なかなか手が出せなかった。小学校時代のすみ子ちゃんの涙の影響である。悲しい物語と知っていて読み出すのは、なかなか勇気がいるものなのだ。本は持っていた。古本屋で買った旺文社文庫特製版『アンクル・トム的小屋』（大橋吉之輔訳）分厚い上下二冊本である。もうすでに、いつ読んだのか忘れてしまったが、読み出したら止まらない類いの本だったことだけは憶えている。読者をぐいぐい引っ張っていく物語性があった。すみ子ちゃんがどこで泣いたのかもだいたい見当がついた。

『アンクル・トム的小屋』には賛否がある。どんなに理不尽な行為でも決して抵抗せず、神にすがって相手を許そうとするトムおじさんを敗北主義的と批判する意見もあるのだ。世界に渦巻く思想対立の永遠の課題かもしれない。しかし、たまには「心が洗われる」ような読書も悪くないのではないか。……最近トゲトゲしている自分の精神状態を省みて、お勧めの一冊としておきたい。

